鈴木翁二

とん。とん こんばんは。

きみだったのか。
雪明かりの町を歩いていたらね

こんな深夜にだって灯っている窓があるような気がして…
たまらなくだれかを尋ねてみたくなったんだ。

ぼくを呼んでくれたの？
何処か遠い國の都会を

私がひとりでステッキをふって
ぽっかりぽっかりとあるいてゐるやうに思はれる

伊藤整「もう一人の私」

ぼくもいま…旧い友だちが昔の姿のままで

尋ねてきてくれそうに思えたんだ。
うん。

だから…もう少し生きてやれそうなきもちになったんだ。

きみは雪の町をだんだんにきれいな青年の姿に戻りながら歩いていたのだな。
きみだって夜を走る電話線の声のように…

雪降る列島を旅して来たんだね。

昼間の光線が雲に閉じこめられ、逃げそびれて、
深夜の雪の町並みは明かるいね。

人はどうして…
赤と黒の手袋を
はめた手で
だれかの窓を叩いて
みたいと思うの
だろう。

たしかにいちど
知り合っていたような、
静かなヨコガオの
青年がいて
お茶にしようと
ことことと
お湯を沸かす
気配がするね。

こうして
映画のような
暗闇に沈んで
ごらん。
パチン

ほうら…
くたびれた人生の
街灯の明りの
かけらが、にぢんで
吐息をついている…
おれだって
昔は…

運河に見捨てた
あの女の
恋人だったんだ…

おれだって
昔は……
だれかともつれる
ようにつれだって
夢を異国語で
話し話し帰る
マントの学生だっ
たんだ……

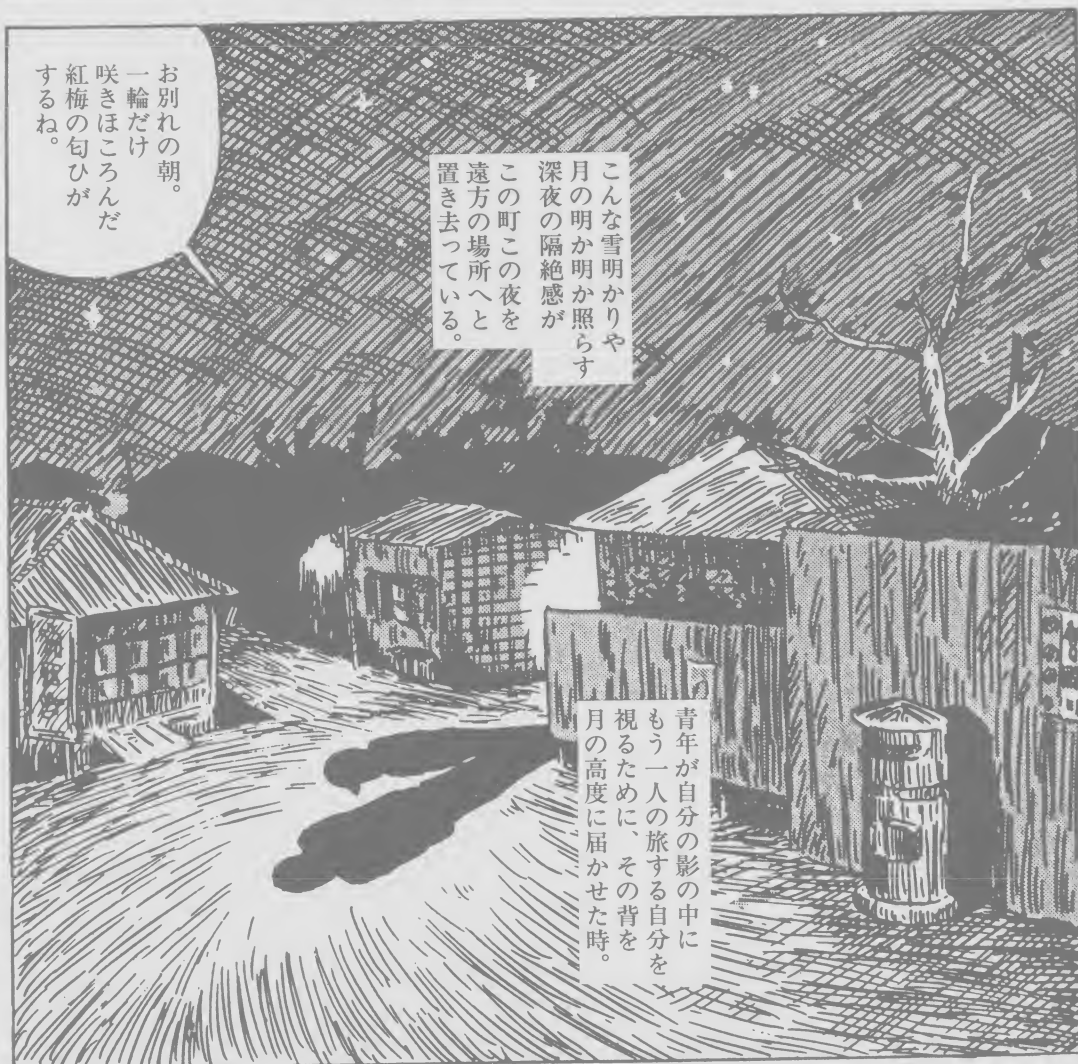
おれだって
昔は……

裸でっ
泣きじゃくって
いた娘の境涯に
恋をして……

映画の闇で
泣いていた
蜘男だったのだ。
休憩のベルが
聞こえないか。
人たちのざわめきが
聞こえてこないか。

忘れたの?
ウルワシノクチビル
をものにしようと
おろし立ての白シャツの
袖を捲くって
水たまりを跳びこえて
着地に失敗した、
初夏の風でも
あったよねえ。

だまれ。後篇のベルが……
隣に掛けたあの女の仕合せだ匂いたたないか。

本能は押さえこまないでね。
ぷ。

こんな雪明かりや月の明か明か照らす深夜の隔絶感がこの町この夜を遠方の場所へと置き去っている。
お別れの朝。一輪だけ咲きほころんだ紅梅の匂ひがするね。
青年が自分の影の中にもう一人の旅する自分を視るために、その背を月の高度に届かせた時。

(梶井基次郎「泥濘」)

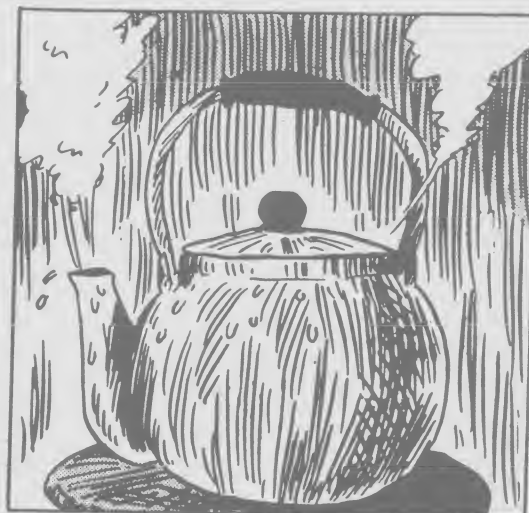
ジュウ
ジュウ
夏の宵祭り、家族をつれたおとうさんが

コンバンワ
オコサンハ
オイクツニ?
コンバンワ…
コンバンワ……
さっき見かけた水たまりに残った空の色を慕しみ、寝床にうずくまる自分である時。

白痴のように泣きながらその水たまりを抱きすくめに行きたいと希う時にも……
ぼくはこれらをたはむれに「白夜の存在意識」と称んでみよう。

「白夜」ではなぜぼくたちは尋ねて行きたいのか。かりに「自我」と称ぶなら
自我は暗闇の重しのとれた白夜でなら、どこまでも手脚を伸ばせそうになる。

自我は一人であり、キキ的でありだから慌てて

古い抽斗から手持ちの写真立てを取りだしてまちはずれに置いてみる。
白夜は要するに

本稿の元原稿は拙作「夜」（1972年作『透明通信』所収）であります。こんなささやかな実験はだれもがその日々の中で繰り返していることだろう。だいぶんの補足が必要だが今はもう時間がない。前回文の〔注〕と合わせて、次回へとくりのべするしかない。